

## 会員通信

### ◎ 安孫子議員

一、前年度の大会では、テーマ設定の意義が必ずしも明確でなかった。それゆえ、各報告の関連がわからなかつた。大会の成功は、テーマ設定の意義に即した、秀れた報告者が必要。

二、統一テーマは迷続していくと思う。

三、報告の組立て方は、秀れた研究者とどうことを前提として考えれば、問題へのアプローチの方法とも関連させて、

理論——村落社会と都市社会の本質（社会関係としての）差違。

歴史——都市社会形成（近代における農村 → 都市形成の地域研究）

現状——昭和四〇年代の農村の都市化傾向（地域実証研究）と云つたことが、考えられます。この場合、事前の研究会活動は、理論中心でもいいかと思ひます。ただし、現状分析まで射程に把えた理論であることが必要。それとともに、いま、都市と村落を考える意義と、その意義解明に役立ち得る理論を考えることが大事でしよう。都市と村落とは必然的に段階論的課題を含みますから、理論がうまくまとまれば、歴史報告は不要でしょう。自由報告でも、歴史・現状との関連で議論できる素材

が出されるでしょうから。ただし、適当な報告者が得られない場合、現状分析を、たとえば地域的に配置し、（例 東北、太平洋ベルト地帯、中国・九州、あるいは、山村、都市近郊、稻作、果樹作等）そのなかで、必ず、都市社会の本質と、研究の意義を明確にしておいてもらう、こともいいでしょう。

以上のどの場合にも、報告者はちがつた立場の方々が、面白く伝えた方がいいと思います。なお、報告依頼の際、こちらの意図をやや詳しいと思います。なま、報告者一人一人に対してもいいと思います。実は、こんな希望に応えられる研究者がどんな方なのか、私にはわからないのです。

附記、①余りにも学説的なだけの報告が皆揃ってしまうのは、（例、「有賀・鈴木における都市と農村」といった場合でも）面白くありません。学説を踏まえて自説の積極的展開を明確に出してほしいと思います。②経済史、文化史は問いません。ただ、研究意義さえ明確であれば、ちがつた立場の研究者といふ場合、分野別（理論の差違だけでなく）といふこともあるかもしれません。理論だけ三本出すにしても、

- 1 歴史・発展段階からみた都市と農村——その歴史的意義
- 2 経済社会構造からみた都市と農村——比較的現状に近く社会学研究者にお願いする。
- 3 文化もしくは、社会意識（現象・宗教等）の構造から

みた都市と農村——歴史的でもいいが、現状近くまでやつてもらう。

という方法もあるでしょう。

要は、いま（一九七三年に）なぜ都市と農村の問題を出すのかということが、明確であればいいです。もう一つ、報告者を厳選して、充分連絡をとり合うことが大事じゃないでしょうか。

四、課題の意義をどう考えるかは、課題委員会の最大の任務じゃないでしょうか。それを会員に充分伝えることがつきです。

これを、「村の解体」「村落研究の方法」という課題の発展の上に位置づけることだと思います。やはり基本的には、

- 1 現状の村落の変化・解体傾向を、日本社会の歴史のなかにどう位置づけ、歴史的意味を考えるか、ということか
  - 2 でなければ、もう少し広く、近代化資本主義社会における都市と農村の役割・意義をどう考えるか、
- このどちらか、ではないでしょうか。さらに広げて、「日本社会における都市と農村」という課題もありますが、これは、村研の今年度大会の意図ではなかったようにも思います。やはり、究極の狙いは、現状、もしくは、近代社会の枠だったろうと思うわけです。

## 五、今後の運営について

- 1 報告者が決まったら、充分拡大委員会と連絡した上で、報告者中心の研究会を一応はその地方でやってもらう。
- 2 できれば、拡大委員会のメンバーが一人は参加する。

2 その他の地方でも、できれば、やつてもらう。しかし無理にはいわない。

3 それらの模様を、ベースの許す限り、「通信」に出す。

4 別個に、東京研究会（従来は中央か？）をもって、リードしてもらう。

といったことが望まれます。

六、課題委員会は、在京委員中心にならざるを得ないと思ひます。

仙台では、数人集つて課題につき討論してもらひ、そのテープを東京に送ろうかといふ話も出ました。

七、大会運営に關して。今年は、日程案では討論時間がいつもより多かったのに、実際はかなり減ってしまった。やはり、討論時間がほしいです。できれば、報告は、二日目、十時には終了するようにならざるを得ないと思ひます。

八、大会運営に關して。今年は、日程案では討論時間がいつもより多かったのに、実際はかなり減ってしまった。やはり、討論時間がほしいです。できれば、報告は、二日目、十時には終了するようにならざるを得ないと思ひます。このため、課題報告を充実したもの三本にしてもいいです。ひょっとすると、三日間乃至、二日半という時期にきているのかもしれません。そうなると自由報告も、討論三、四〇分あつていいと思います。これも、充実した報告を得ての話ですが。また報告の個々の長さは、四〇／六〇分は厳守してもらいたいと考えます。

#### ◎ 後藤和夫会員

昨秋大会に出られなかつたので、統一テーマへの意見といつてもまつたく腰だめのことしか申しあげられません。

一、統一テーマについて——昨年の継続がよしと考えます。

#### 二、報告の時代的範囲に關して。

この共通テーマは、村研にとつては新しい（？）のだから、まず基本的なことから、ある程度巨視的に押えていくよう討議の視野を設定しておく方がよくはないか。というのは、わが国での資本主義の発達、あるいはそれぞれの体制的条件下での都市と村落の関係とか、構造的な特徴とかをまず押えていきたい、ということなのですが、そのためには明治期から現在までを主範囲にして、比較ないし前史的考察の意味で、近世が報告に入つてくるのは、認めてよいのではないか。そのあたりが昨秋大会でできているなら、たとえば本年度、第二次大戦後の段落に限定して、そのうえで、地域的、類型的な両者の関係の区別を念頭において、討議内容が深められれば、と考えます。「通信」第八四号の島田氏の九ページの上段の文意では「時期としては一応出そろつた」が、「しかし、……」とあるから、もう一年、戦前から戦後をふくめて、やるのかいいではないか？と考える次第です。

#### 三、調査報告中心か、理論中心か。

前者が主となり、一、二の理論報告が加わって、後者が前者の個別報告の論点の整理や比較を助ける形で、結びつけられるといふのですが。なお前者の個別報告も、ケースの全体的な歴史的位置づけや、それなりの一般化をふくんで報告されることが、当然ながら望されます。